

誠 首（脱 cap）

——19世紀関税政策と「税関」——

竹 村 和 子

『緋文字』の序文とみなされるテキスト「税関」には、これまで『緋文字』自身ほど批評家の注意が払われてこなかった。ニナ・ベイムの言うように¹⁾、単に『緋文字』の陰鬱さとバランスを取るために配されたコミカルなエッセイであるとか、税関罷免に対するホーソーンの個人的恨みの表出にすぎないとして無視される場合が多かった。しかし全般的には不遇の待遇であったが、後続する『緋文字』に関連しての分析はなされており、特に近年では批評対象として取り上げられることが多くなっている。これまで試みられた「税関」批評を大別すると、次の三つの読み分類することができる。ひとつは主題的読み、もうひとつは記号学的読み、三番目は文化批評的読みである。

「税関」は自伝的色彩の濃いテキストである。語り手は一人称で登場し、以前、旧牧師館にちなんで「身の上話」²⁾をしたことがあると語る。事実、ホーソーンは1846年に『旧牧師館の答』と題する短編集を上梓しており、その序文「旧牧師館」はそこでの自己の生活の模様を描いたものである³⁾。また語り手は、税関における自分の勤務ぶり、そこに働く官吏を戯画化してみせるが、ホーソーンが1846年から49年までのあいだセイレムの税関に勤めていたことは周知の事実である。彼がその職を辞した理由も、テキストの記述どおり、合衆国大統領選による政権交替のためである。したがって主題的読みは、往々にしてこの伝記的事実を『緋文字』の主題に結びつけようとする。

その典型は、「税関」の語り手と『緋文字』のデムズデイルを重ね合わせ、このテキストを俗人から芸術家への移動の軌跡と読む⁴⁾。ヘスターが社会の論理の外側にいる自由人（芸術家）とすれば、デムズデイルはその内側に留まろうとする体制側の牧師である。しかし、彼がテキストの最後で、自分の反社会的行動を告白し、「不名誉ではあるが勝利の死を得る」（257）ことができたように、ホーソーンもまた、税関の検査官という退屈な公務から『緋文字』執筆という創造的生活へと立ち戻り、またそれを「税関」というテキストによって

「告白」することによって、デムズデイルと同様に、俗人から芸術家への移行をなし遂げたというのである。一方のテキストがもう一方のテキストのメタ・テキストとなるという分析は、すでに第二の読みの範疇（記号学的読み）に近い。しかし、この第一の読みで、十年一日のごとき単調な税関での日常生活を「昼」（36）の世界、それに対して創作の領域を、「想像力」（35）が自在に羽ばたく「白い月光」（36）の世界として、後者を前者に優越するものと解釈すれば、それは後続の『緋文字』においても、我が罪を告白する前のデムズデイルを世俗の欲望や浅知恵にまみれた罪深き存在とし、告白後のデムズデイルを高い宗教的理念を完遂した真の人間とする、モラル的価値を内包した主題的読みに連動するものになる。作品が提示する（と思われる）ひとつの主題（意味）に向かって解釈が組み立てられていくのである。

しかし第二の読み、記号学的読みは、テキストをひとつの意味の体現とはみない。むしろ関心は、テキスト内部の意味のネットワーク、その言語的自意識の方にある。ジョン・カルロス・ロウは『税関を通して』の論文集のなかで、こう語っている。

税関は二つのものが交差するテキストであり、時空である。つまり過去と未来、伝統と創意、決定性と自由、無意識と意識、見知らぬものと見慣れたもの、いわば「ヨーロッパ」と「アメリカなるもの」が出会うところである。こう考えてもよいだろう。税関を通った交換とは、作者と読者、生産者と消費者のあいだに起きる出来事なのだ⁵¹。

ここで言う税関が文学テキストを意味していることはおわかりだろう。彼は文学を、こうも定義する。「文学は、それが言語にほかならないという認識を忘れようとし、抑圧しようとし、先送りしようとし、逸らそうとする。だがその認識から逃れることはできない」⁶¹。ロウはこの論文集で直接、「税関」を分析することはなかったが、彼の理論は、エヴォン・カールトンの『アメリカ・ロマンスのレトリック——エマソン、ディキンソン、ボウ、ホーソーンにおける弁証法とアイデンティティ』のなかにその実践をみることができる。

カールトンはホーソーン論のなかで「税関」を、「過去と現在、現実と夢」という相反する概念を「結びつけ」乗り越えよう⁷¹としたテキストと位置づける。その意味では、これは『七破風の屋敷』の序文で書かれた有名なロマンス論とは、まったく逆のものとなる。『七破風の屋敷』では、ロマンスは現実生

活との対応物をもつ必要はなく、自由に想像の世界に遊ぶものであった。したがって求められるのは「創作の結実」であり「社会から身を引いた守りの姿勢」であった。しかし「税関」で示されるロマンスは、それらの要素と「創作の過程」や「社会への積極的介入」を弁証法的に止揚した場なのである(162)。なぜそうなるのか。

「税関」の最初で語り手は「自己疎外」(152)に直面しているとカールトン は分析する。それは、「悪魔的に気前のよい合衆国」(152)の官吏の職を得ることによって、文学創作においては「社会から孤立した病的な細密画家」(152) となってしまったからである。だが語り手はこの「自己喪失」の状態から、「『緋文字』を書くことによって、自己確立(パーソナル・アイデンティティ)を得ることができる」(153)。「個人的・空想的な過去と、セイレムの歴史的過去、ホーソーン の先祖がもっていた倫理上の過去、税関の公文書庫のなかに秘められていた過去、これらすべてが不可分であること」(154)がテキストのなかで語られ、「歴史と芸術、現実と夢の相互依存性」(160)が提示されるからである。

「実務」から「ぼろ布」へ「文字」へ「A」へ、推測から断定へ証明へと進むことによって、ヘスター・プリンの「謎にみちたシンボル」は、ホーソーン の想像力を借りて高らかに現存するもの(presence)となる。しかしこれは、あくまでも再現(representation)された現存であり、不在しているもの、「すでに忘れられたもの」、「けっして回収されないもの」に依存し、その痕跡を有している現存でしかない(161-2)。

ここで示されているのは、何らかの社会的、倫理的価値ではない。テキストがいかにジャンルの境界を侵犯し飛翔できるか、現実がいかに言語(不在の実体)のなかに痕跡としてのみ姿を現すかということである。したがってこの第二の読みでは、テキストの外部(例えば自伝的要素)はテキスト内の意味のネットワークを開陳するときの材料として使われるだけである。「税関」の自伝的要素から一つの価値基準をつくり出し、それを『緋文字』に対応させて解釈するということはなされない。あくまでも意味にはテキストの力学のなかの相対的位置しか与えられず、むしろ意味の乱反射、価値の多元性こそテキストの豊穡さを保証するものとして評価される。したがってテキストの意味(群)が、執筆した時代に束縛されることはない。「税関」の自伝的要素も、19世紀という時代に投錨されることはなく、特定の時代に帰着されないテキスト産出の普

遍的現場として取り扱われるだけである。

だが前出のロウの理論がデリダやニーチェ等を縦横につかい、言語に対する自意識を強調しているにもかかわらず（あるいは強調しているがゆえに）テキストの外部が「アメリカなるもの」という言葉のなかに立ち現れてくるように、この記号学的読みは、第三の文化批評を呼び込み、それへと横すべりする可能性をもつ。すなわちテキストの外部が、固定した意味を有する確固とした歴史的事件ではなく、レトリックが支配する意味のネットワークとみなされて、テキスト批評のなかに積極的に取り入れられるのである。したがって文化批評は、テキストの外部がいかにテキスト内部に包埋されているか、あるいはテキスト外部と内部が、そのような区別的な呼称を必要としないほど、いかに相互関連しあっているかを検証するものとなる。テキスト外部は、あるときは社会の通念構造であったり、政治的枠組みであったり、経済上の運動であったりする。

近年、文化批評的読みで「税関」に言及しているのは、ロバート・クラーク、マイケル・T・ギルモア、ジョナサン・アラック、サクヴェン・パーコヴィッチ、リチャード・T・ミリントンである⁹¹。だが彼らの批評はどれも、「税関」というテキストの語りの型、および語りの内容のみに着目して、テキストの背景が税関であるという特殊性については不問に付したままだ⁹²。また彼らによって照合されるテキスト外部も、南北戦争前の合衆国のスローガンであったり、当時の政治状況であったり、出版状況であったりはするが、交易をめぐる政治・経済構造ではない。現在のガット・ウルグアイラウンドの交渉を見てもわかるように、関税は国家の政治・経済機構にとって極めて重要な事項であるにもかかわらず、これまでの「税関」批評はつねに、税関を単にホーソーが偶然、職を得た場所とみなすだけで、その退屈な職場はロマンス執筆という文学的営為と対照させるものでしかなかった。だが、果たして19世紀前半という時代において、税関はそれほど世間の「大通り」から取り残された無風地帯、その意味を考える必要もないほどの矮小な職場だったのだろうか。以下の分析は、「税関」の背景が税関であることに着目し、当テキストがその事実とどのような関連をもつか、またそれが後続する『緋文字』とどのように関連するかを考察するものである。

*

*

*

「税関」は三つの部分に分けることができる。第一は語り手がセイレムに戻り、自分の先祖についての感情を吐露する部分、第二は現在税関に勤務している役人たちを戯画化する部分、第三は緋文字を見つけ、それを題材にしたロマ

ンスの執筆について語る部分である¹⁰⁾。

第一部では、語り手の「古きセイレムに対する感傷」(8)と父祖への複雑な思いが述べられる。彼は「セイレムが自分にとって宇宙の避けがたき中心であるかのように……舞い戻ってきた」(12)。彼の遠い父祖が「まだこの町が若く幼少であったころに深く根を下ろして以来、一族がずっと生活してきた」(12)場所だからだ。「社会的地位のある」(10)先人から見れば、自分は「のらくら時を過ごすバイオリン弾き同様の墮落した人間……物語作家」(10)ではあるが、一族が「誕生し埋葬された」(11)土地に、「運命が私を呼びよせた」(12)かのごとく帰ってきたのである。この陳述部分は、第三部で展開されるロマンス論と相俟って、芸能を否定するピューリタン伝統からの作家の離脱宣言と解される場合が多い。しかしむしろここには、家族制度(とくに家父長制度)への帰属意識とその崩壊という二つの相反する要素が、絶妙のバランスをとって提示されているとみた方がよいのではないか。

ここで語り手に強迫観念のように取り憑いているのは、父祖の亡霊である。彼の父祖は「先祖(ancestor, progenitor)」(9)というように性別のない呼称で呼ばれることもあるが、それが指し示しているのは「軍人、立法者、判事、……教会の支配者、……敵しい迫害者」(9)など、すべて家父長的な男の人格である。事実、他所では「父(father, sire)」、祖父(grandfather, grand-sire)、「父祖(forefathers)」(10-11)というように、明確に家父長制度を示す単語が使われている¹¹⁾。また語り手がセイレムを語るとき、大抵の場合「私が生まれた」という修飾語がつくことを考え合わせれば、この第一部には、植民地時代からの貴族意識を基調とした家族概念、家父長制度が書き込まれていることがわかる。しかしたとえそうであっても、他方で語り手は父祖が軽蔑する「物語作家」だと自己を説明しているので、ここには古い家系への作家の反発もまた表明されているという反論もあるだろう。しかしここで注目したいのは、社会的要職 vs 作家稼業、家督の重み vs 個人の反発という二項対立ではない。なぜなら、この第一部で叙述されているのは語り手の作家としての門出ではなく、彼が「税関行政官」(12)としてセイレムに赴任したことであるからだ。むしろ第一部で対立しているのは、「軍人、立法者、判事、教会の支配者、迫害者」といった古い家名を継いで就く職業と、「大統領の辞令」(12)によって任命される職業である。つまり「父から子へと」(10)受け継がれていく制度と、国家および国家の法が支配する制度である。

ブルック・トーマスは『法と文学の比較研究——クーパー、ホーソー、ス

トウ、メルヴィル』の「バトルビー」論で、マイケル・グロスバークの論を引きながら、18世紀から19世紀中葉にかけての社会構造の変化を次のように語る。

……法の或る領域においては、法廷が影響力を拡張し、それまで父権的保護者として機能していた教会や家庭の社会的役割に、とってかわるようになった。……「父親から男性の法律家へ権力が移行することによって、判事は一種の新たな家父長となつて、もともとの家父長である父や祖父と離断をきたしている家族に対して、力をふるえるようになった」¹²⁾。

ここで示唆されているのは、18世紀から19世紀半ばにかけて、家父長的権限が、教会・家庭から法の制度へと変化してきたことである。独立戦争以前には、権力は父から子へと伝わった。『七破風の屋敷』のピンチョン家はその典型だ。同時にそれは教会の拘束力でもあった。ピンチョン家の子孫であるクロフォードが過去に呪縛されているあいだ教会に行くことに固執したのは、その好例である。だが教会が徐々に社会の表舞台から退くのと同時に、貴族的な家族意識も、民主主義を標榜する合衆国の礎が築かれていくにつれ、その局所的価値観が否定され、代わりに国家（あるいは国家の法）という概念が優越してくる。法が家庭や教会の長にかわって、父権的機能をもつようになるのである。「税関」のなかで、修身検査官を「税関の父——ここにいる少数の官吏の家長であるだけでなく、敢えて言えば、合衆国全体の偉い乗船税関吏の家長」（16、上点引用者）と呼ぶのは、その証左である。いや語り手自身、自分の「彼ら〔部下の老税関吏〕に対する立場は、父親的、保護的なもの」（15）だと述べ、税関という空間において、家父長的権限が伝統的家族制度から法体制へと移行していることを示している。

ところが「税関」の場合、このような新時代の秩序が具現されるのは、西部の開拓地ではなく、セイレムという旧秩序の蔓延する町であった。また、セイレムは語り手が任命された土地であり、しかもホーソーン自身は任命前にすでにここに居住していたにもかかわらず、「運命に呼びよせられて」懐かしき父祖の地へ自ら舞い戻ったと詐称する。あるいは、親友に宛てた作者の手紙のなかでは「この町に職を得た」喜びの理由を、セイレムに住めることではなく、「贅沢できる余裕のある快適な生活」と「文学活動するゆとりのある楽な勤め」のせいだと述べる¹³⁾。妻ソフィアの手紙でも、赴任に際してのもっぱらの関心事は、給料である¹⁴⁾。だが「自叙伝的なものである」（4）にもかかわらず、

「税関」はこのような事情を隠蔽し、「生まれた町への愛着のゆえに、合衆国（アングル・サム）の煉瓦造りの建物に職をみつけることになった」（12）と韜晦する。したがってこの第一の部分は、執筆当時すでに過去の制度となりがけている家父長制度と新時代の法の制度の両方が、イデオロギーの審級では前者から後者への移行という形をとりながらも、プロットの因果律の上では、双方が混線し、ウロボロスの図のように絡み合って提示されている。逆に言えば、自伝形式を標榜しているこのテキストは、一方で当時の社会を分節する深層コードを明らかにしながら、他方で、物語生成の過程においてそのコードを攪乱し、換骨奪胎するという二重の作業を行っているのである。

* * *

税関の役人を素描した第二部については、彼らと『緋文字』の登場人物たちを対比させる試みがある。しかし『緋文字』の各登場人物は、税関の官吏との対応図式におさまりきらない「球形人物」であるゆえに¹⁵⁾、本論では個々の役人の性格を分析・考察するのではなく、そのような性格づけがなされている背景に注意を向けたい。彼らの人物描写には、その背景を言挙げするに充分なほど、共通した雰囲気が見られるのである。

ここに選ばだされ活写されている官吏にも、その他大勢として描かれている下端職員にも共通する要素は、老齢ということである。検査官、徴収官は、そのぞれ 80 才、70 才代であり、その他大勢組もそのほとんどは、「半世紀の嵐をへて深い溝を刻んだ頬」（14）をした「退屈な年寄り連中」（16）であった。また彼らは老齢であるだけでなく、どこか時代と齟齬をきたした不活発さを有している。「事務能率に欠け」、勤務時間の大部分を「波止場をよろよろ歩いたり、……居眠りをして過ごす」（14）下端役人は言うに及ばず、「完全に壮健な肉体」（17）や「ニュー・イングランドの不屈の魂」（23）をもっている検査官、徴収官にしても、その活力や英気を、怪物的な食欲や身にそぐわぬ役所仕事にしか向けられず、全般的には「非常に場ちがいな」（23）印象を与えるのである。そして役人というよりも小説家気質の語り手をはじめとして、以上のような実社会から乖離した官吏を有しているのがセイレムの税関である。ここでは、人物描写のなかに戯画化されて、セイレム税関の恐ろしいほどの不活発性、斜陽性、大時代さが強調されている。第一部ではイデオロギーの審級において、時代錯誤的な家父長制度から新時代の法制度への移行が見られた。だが第二部では、その法制度がそれを体現するはずの役所内部で空洞化されているのである。

前出のブルック・トーマスは、18世紀から19世紀中葉にかけての社会構造の変化を、家庭や教会を基盤とする家父長制度から国家の法体制への移行と説明したのち、それに加えて、さらに国家（の法）の権限が後退し、自由な経済活動へと移行する時期であるとも述べている。

……法が家庭や教会が以前に我が物としていた家父長的な権限を継承することになった理由は、新しい経済システムによって、旧来の社会の結合が壊れてきたことである。しかし、新しい経済システムは、法廷が市場の「自然」原理に介入するのを控えた方が、促進される。したがって判事は、経済領域では平等を保証するという当初の機能から身を引き、だが家庭内の問題には家父長として介入していかなければならなくなった。

……例えば18世紀には、もしも売買契約で交わされた価格が「適性価格」でなければ、衡平法裁判所でその価格は無効にされた。しかし19世紀では、「買い手の危険負担」の原理が適性価格の原理にとってかわったのだ。裁判所は、たとえその契約がひどく不公正なものであっても、「自由な行為者（フリー・エイジェント）」同士で交わされた契約には、ますます介入する度合が少なくなったのである¹⁸⁾。

税関は、他国の産業システムと自国の産業システムが「交差する時空」であり、「経済活動にのっとって」（28）建てられた場所である。また後述するように関税政策は、19世紀前半の合衆国の場合、資本主義体制が自らのイデオロギーを書き込もうとしたテキストでもあった。したがって税関という状況設定は、家父長制度から法体制への移行とともに、さらに資本の論理が台頭する過程をも示すものとなる。

「税関」の始めの部分で、「英国とのこのあいだの戦争以前」（6）という表現があるが、これは1812～14年の対英戦争を指す。テキストではこれ以降、貿易が不振となると記述されているが、実際には、戦後しばらくは英国産の製品がますます合衆国に入り、またヨーロッパの不作や英国の綿花思惑買いのために国外需要も伸びて、貿易は盛んだった。戦争不況が訪れたのは、少し遅れて1819年のことである。翌年1820年に、保護関税によって地場産業を保護しようとする中部諸州と、関税をかけないで綿花を英国に安く売ろうとする南部とのあいだに関税論争が持ち上がり、議会では一票の差で否決された（ただし後に関税率は上がる）。ニュー・イングランドはこの論争で分裂し、製造工場の発展を望むコネチカット、ロードアイランド、一部マサチューセッツは関税法案支持にまわり、貿易・造船に従事する一部マサチューセッツは反対にまわっ

た¹⁷⁾。セイレムの住民を描写する際に、彼らは「百年以上も海に出ている」(11)と語られ、往事を忍ぶものとして「船長」、「船主」、「商人」、「水夫」という人種が紹介される。セイレムに居を定めていたホーソンの父が西インド諸島との貿易に従事し、南米スリナムで客死していることを考え合わせても、この港町の保護関税否定の構造は浮かび上がってくる。事実セイレムは、保護関税によって資本主義体制を育成しようとした機運に取り残され、中部との交易を重視し「商業の上げ潮」にのった「ニューヨーク、ボストン」(6)によって代わられるのである¹⁸⁾。

テキストでは税関の同僚を紹介する際に、必ずしも全体の回顧的描写からは必要と思われない人物が、最後に挿入されている。「幼い時から税関で育ち、税関を本来の活動の場とし、まさに税関そのもの」(24、上点引用者)と呼ばれている男である。彼は「ビジネスマンの素質をもち」、「出納の残高計算」ではつねに正確で、「われわれ同僚以上に商人から重宝がられている」(24)人物である。いわば彼はバートルビーの裏返し——「ウォール街の物語」の書記がそうなれなかった姿——である。したがって彼によって擬人化された税関は、法制度が支配する役所であると同時に、資本の論理によって要請され、資本の論理によって機能するビジネスの世界でもあった。税関に勤める大多数の老人官吏の非能率性、不活発さ、大時代さは、資本主義に取り残されたセイレムの斜陽性を強調した。さらに、この能吏の会計事務の有能さは、現実世界において、法体制が資本の論理に道をゆずりつつあることを明瞭に指し示すものとなる。

だが、第一部で家父長制度から法体制への移行が表明されると同時に韜晦されてもいたように、第二部において提示された、法制行が資本の論理に巻き込まれる過程も、単純な提示に留まるものではない。たしかに税関に勤める役人の戯画化は、フレデリック・ジェイムソンの言葉を借りれば、「描写内容を脱現実化し、それを純粋に審美的なレベルで消費しうる商品に変える」¹⁹⁾物象化を行うことである。つまり現実を保証し、再生産し、永続化させることになる。しかしロマンス執筆の由来を語る第三部は、当時の社会構造を再び提示すると同時に、その修辞性をも暴いてゆくのである。

* * *

第三部の叙述は次のように展開する。最初、語り手は自分が現在「実務家」(26)であって、もはや「文学的名声を夢みる人間」(26)ではないと自嘲ぎみに語り、次に、「ある退屈な雨の日」(29)、偶然に紺文字と故ビュー行政官の

記録を発見し、それによってロマンス執筆の意欲が沸いたと述べる。だが「想像力が曇った鏡」(34)となっている「みじめな麻痺状態」(35)のため執筆はおぼつかず、また大統領選による政党交替のため税関は罷免されたと語る。結果的にはこの解職によってロマンス執筆が可能となるのだが、税関の罷免とロマンス執筆との関連はそれほど一枚岩的ではない。

17世紀以来のピューリタニズムの伝統を19世紀合衆国のイデオロギーに結びつけて論じるサクヴァン・バーコヴィッチは、近著『緋文字の役割』のなかで、税関の正面、合衆国の旗の下に鎮座しているアメリカ鷲に言及して、以下のように言う。

鷲と「A」。両者には多くの対立点があるにもかかわらず、ともに同じ文化土壌から生まれたシンボルである。ともに権威がつくり出した、曖昧性に満ちた人工物である。ともに個人のヴィジョンによって、自己主張と共同体への適応を同時に行うように変形された、社会の表象なのである。どちらの場合も、社会への適応行為は、歴史のなかの都合の悪い出来事——悔俊のため「潰瘍ようになった〔ヘスターの心の〕傷」(85)とか、ホイッグ党の鉤爪によってホーソーンが受けた1849年の傷——を鋳直して、文化的営為である芸術にしてしまう。……したがってこう言うのが適切だろう。二つのシンボルは、アイロニカルに描かれているが、その共通の土台をセイレムの税関のなかに見出すべきなのである。セイレムの税関、それは「合衆国（アングル・サム）の煉瓦造りの建物」(12)であり、またホーソーンにとってピューリタンが国の歴史の入口であるように、1849年の国家の入口なのである。力強く巧妙な彼のヴィジョンは、すでに1850年に近代のもっとも強力な唯一のイデオロギーとなっていたものの象徴的源泉の正しさを、立証しているのである²⁰⁾。

バーコヴィッチは、「A」が17世紀ピューリタンのイデオロギーだけで解釈されるべきものでなく、1850年に移しかえて読まれなければならないと言う。

「税関の二階」(28)で見つけたぼろ布は、「たまたま胸につけてみたとき」(32)、「ほとんど肉体的で、あたかも心が焼けつくような感じ」(32)を語り手に与えた。だが、その後ピュー氏の手記を読むうちに、語り手は「A」について一行も書けなくなる。その理由を彼は、「国家の強力な腕によりかかっているあいだに、自分本来の力がなくなってしまう」(38)せいだと言う。だが、果たしてそれだけだろうか。語り手が呻吟しているとき、「あの緋の象徴と、それを説明した一巻の手記を伝授してくれた」(33)ピュー氏が、亡霊となっ

て彼に語りかける。「利益は全部おまえのものだ。……だが、言っておきたい。この老女プリンの事柄については、おまえの先輩である私の記憶を、必ず信じてほしい」(33-4)。語り手が赤い布から『緋文字』を生み出すには、「百年前の装いをして、永遠不朽のごとく同じ髪をかぶっている」(33) ピュー氏の亡霊——換言すれば、百年前のコンテキスト——から抜け出す必要があったのである。そして「A」の文字を語り手自身のコンテキスト、19世紀中葉の合衆国のコンテキストに接ぎ木できたとき、『緋文字』は「公にされることができた」(34)のだ。そしてこれを可能にしたのが、税関誠首(decapitation)なのである。

第一部では、イデオロギーの審級において家父長制度から法制度への移行が語られていると述べた。第三部で、語り手と同じ職種のピュー氏を「公的な先祖」(33)と呼んでいることは、ここでもその移行を再度、表象していると解釈できる。同時に、第二部で展開されていた、法の支配から資本の論理への移行もまた、ここに書き込まれている。この文書が見出されたのは「公用書類」(28)の保管庫であり、たとえこの書類がそのなかに「紛れ込んだ……私的な」(28)のものであっても、その処分法の一つが「エセックス歴史学会への寄託」(31)ならば、この文書は法の権限下にあるものと読める。ところがそのような書類を語り手はロマンスに作りかえ、「タイトル・ページに」(27)記された彼の名は「香辛料の袋、ベニの籠、葉巻の箱などの、……「商品」の」箱」(27)に刻印された名と同じく、流通の経路にのって流布していった。公的権限下にあった書類が、経済の流通経路にのり、法から経済へという動きが示されるのである²¹⁾。だが他方で、経済がじつは、いかに大掛かりな法の体制と結びつくか、自由競争、市場原理、レッセ・フェールの信条という資本の論理が、いかに権力の布置のなかで確立され、その内実を空洞化させているかということも、また書き込まれるのである。

関税政策に話をもどそう。19世紀合衆国の関税政策は、資本主義(自由主義経済)体制の確立をめざして自由貿易を制限するという、矛盾した役割を担うものであった。関税擁護論者は、国内の産業を保護し、自由主義経済の活動を促進させ、ついでに南部の貴族主義に抵抗しようとした。産業革命の過渡期には、保護関税はきわめて民主的で資本主義的な政策であったのだ。だが他方でそれは、自由貿易のレッセ・フェールの信条、簡素な政府という民主主義の原則に反するものであった。ヘンリー・ディヴィッド・ソローの「今の政府は港に入ってきたある種の外国商品の輸入に課税したので、悪い政府だ」²²⁾の言

業はそのことを代弁している。保護関税は民主主義国家・自由自助の経済体制にとって、諸刃の剣なのである。したがって18世紀末から19世紀にかけて課税された関税は、その是非についての危機的議論があったにもかかわらず、また右派・左派がそれぞれの立場で賛成・反対を唱えてはいたが、実際には不況などの影響で（1832年の関税法と1833年の妥協関税を除き）関税課税は実施され、その率は高かった。関税率が実質的に大幅に引き下げられたのは1846年のウォーカー関税法以降だが、それは政策の原理原則のゆえではなく、景気の回復と産業革命がすでに進行していたためであった。つまり関税は、政党の政治理念の大きな要素であったにもかかわらず、実際は、現実との妥協がもっともなされた事柄であったのだ。いや現実との妥協というだけではない。むしろ積極的な現実軌跡のレトリックに使われていたものでもある。

関税に関する発言で注目されるのは、賛成・反対の両者が極めて類似した弁論術を使っていることである。関税をめぐる二人の政治家の発言を見てみよう。ヘンリー・クレイは関税を支持する「アメリカ・システム」の演説のなかで、以下のように言う。

二つのクラスの政治家が合衆国の世論を分断している。一派の制度に従えば、外国の工業製品には、国家の歳入を賄うに足る輸入税以外は、課せられるべきでないという。アメリカの工業製品は、もしも可能ならば、臨時の保護を除き、国の内外における競争者の外国商品との競争では、放任して自助の精神に任すべきである。他の一派の制度によれば、輸入税は、国家の歳入の適切で便利な源泉として大いに当てにすべきであり、何らかの修正を加えれば当てにすかまわないということに同意したのち、さらに、アメリカの産業を徐々にしかし適切に保護するため、また外国への依存度を少なくするため、外国の綿製品への課税は適切に制定しようとする……。両派とも、それぞれの意見において等しく誠実で、等しく正直で、等しく愛国的で、国の繁栄や進展を望んでいる。……

さて我々の周りに目を転じれば、我々の耳目を引き、千載の恨事というべき最大の事柄は、我が国全体をおおう由々しき不況である。……

……もっとも望ましいのは国内市場と国外市場の両方があることである。だが、双方を比較してどちらに優先権を与えるかということになると、疑いはありえない。国内市場が第一で、重要さにおいても突出している²³⁾。〔上点引用者〕

他方、それに反対したダニエル・ウエブスターは、このように論を展開する。

諸君は国内産業に益するようにしたいと言う。私もまた同じである。諸君は国内産業に保護を与えようという。私もまた同じである。しかし国内産業は製造業だけに限らない。農業、商業、海運事業は、どれも同じ国内産業の各部門である。これらはすべてアメリカの資本、アメリカの労働力の雇用を提供する。……

質問させていただきたい。国の現状が国家的不況だと言われているときに、この関税はどのような救済を、国家の根本的利益に与えることができるのか。

……世界のあらゆる商業国と競争をつづける我が海運にとって、決定的なダメージとなるのが、この最後の関税である²⁴⁾。〔上点引用者〕

両者の弁論に共通する特徴は、共通の基盤を提示し、譲歩のレトリックを多用していることである。「以外は (no other than)」, 「限らない (is not confined to)」, 「もしも可能ならば (if it can)」, 「同様に (both, equally, so am I, all)」等である。彼らの演説はどちらも大変長く、そのなかでまず々と相手の立場を認め、共通の基盤に立っていることを強調し、次に自論の正当性を主張する。これらの演説は1824年になされたもので、これから数年後には関税反対のサウス・カロライナの去就をめぐる合衆国を二分しそうな危機的場面が訪れる。しかし対立意見を擁護する彼らの姿勢は、関税の問題が確定的な政治姿勢を要求する厳格な意味の外延をもつものではなく、流動的な要素を含むものであることを示している。事実、ウェブスターはのちに関税賛成にまわり、またサウス・カロライナ出身で関税「無効宣言」の理論創設者であるジョン・カルフーンは、以前は関税賛成論者であった。ジャクソン大統領も、民主党の理念からは関税反対であるにもかかわらず、「わが連邦のために、〔関税は〕死守しなければならない」²⁵⁾との乾杯の言葉を述べ、サウス・カロライナを弾圧する。これらのことは関税がいかに政治の言説のなかで機能する事柄であったかを示している。奴隷制度の賛否はそれに対しどのような自己正当化を揮造するかという意味で、修辭的な問題でもあった。だからこそ戦争の旗印になりえたのである。だが関税問題も、地場産業という実体に係留した問題であると同時に、権力の布置によって価値が流動する、きわめて恣意的な問題だったのである。

関税課税に対して両義的解釈を誘因する H・クレイの「アメリカ・システム」、影響力の大なる政治家 D・ウェブスターの変節、ジャクソン大統領の矛

盾した政策、それらは、関税が実質的に経済だけの問題ではなく、合衆国の国家形成の一助とされた事柄だということを物語る。したがって関税に対して政党同士がまったく正反対の綱領を掲げていても、政党交替によって、実質的に関税対策が急転回することはなかったし、たとえ政党交替による関税対策に変化が見られても、通商部門や領土拡張など他の政策との間に、政党変遷の経緯から見て必ずしも首尾一貫した見解がとられていたわけではなかった²⁶⁾。これと同様のことが語り手の税関罷免について起こっている。彼は自分の罷免について、それが政治構造上必要不可欠のものではなく、もしかしたら在任の可能性があったかもしれないと口惜しうに語る(41)。事実、彼が奉職した3年前、彼は一部を除いて反対党の老官吏を免職させはしなかった(14-5)。たしかに「通念に従えば」(15)、反対党の職員を解雇するのが義務ではあった。しかし語り手がそれを実行しなくても、問題は起こらなかったのである²⁷⁾。表向きの「通念」や政党理念を超える、もっと大掛かりな権力のネットワークが形成されつつあったのだ。各政党の掲げる民主主義、市場原理、「明白なる使命」、自由、平等、繁栄等が、じつは関税政策と同じく、固定した意味の外延を有するものではなく、レトリックとして臨機応変に使われ始めていたのである。資本主義(マナー)のネットワークと、近代国家としての言説——主体・繁栄・進歩・市民倫理といった言説——のネットワーク双方による、広範囲の抑圧システムが作動しようとしていたのである²⁸⁾。ジャン・ボードリヤールは、合衆国は、ヨーロッパ諸国と異なって「我々に痕跡を留める1789年革命」²⁹⁾をもたないがゆえに、因習に対する「否定性や矛盾に生きる」(156, 79)が必要がなく、「歴史的出来事として資本が有する絶対的主導権」(159, 80)を具現する、「近代性のオリジナル版」(151, 76)だと述べている。資本がもっとも効果的な形で、レトリカルな言説と結びつくのである。マナーと言説という二つの記号が縦横に流れ、脱中心化された権力のネットワークを形成していくのだ。その渦中にいながら、その過程を目撃したからこそ、税関を罷免された語り手は、時代の動きを「税関」のなかにテキスト化し、それによって、19世紀の『緋文字』を書き上げる用意ができたのではないか。

語り手は執拗に、税関罷免を首切りのメタファーで語る。「ギロチン」(41)、「首(head, 以下同)をちょん切る」(41)、「叩き落とした首」(41)、「私自身の首がまず落ちる」(41)、「人間の首がころがり落ちる瞬間」(41)、「誅首された(decapitated)状態」(43)、「アーヴィングの首なし騎士」(43)、「政治的ギロチンというメタファー」(43)、「誅首された(decapitated)行政官の遺作集」

(43) といった具合である。ところで、資本主義 (capitalism) がラテン語で頭 (head) を意味する “capit” に由来しているとして、“cap” (フランス語の “head”) を資本主義に、議会制民主主義に、メディアの中央処理装置に、精神の普遍性に、超越的文化に……と鮮やかに結びつけていったのは、ジャック・デリダの近著『もうひとつのキャップ』である。

……ヴァレリーは、「資本 (capital)」という語のもつ多義性を利用する。資本の利潤は、その剰余価値から、記憶、文化的蓄積、経済的価値つまり信用等の、様々な意味を産みだし、豊かにする。ヴァレリーが使うのは比喩のレトリックだ。このとき資本の諸形態＝文彩 (figures) は互いに参照し合い、字義的意味での固有財産＝固有性 (propriété) に固定されることはない。しかし字義的意味を拒否するこの多義性は、ヒエラルキーを拒むものではなく、また意味の連鎖を横一並びに水平化するものでもない。

「資本」のさまざまな価値の、この意味論的、修辞論的な資本化のなかで、もっとも興味深い＝利益をもたらす (intéressant) 瞬間は、どういう瞬間だろう。それは、資本の「地域的」または「特殊な」必要性が、「普遍」という絶えず脅かされる生産物〔訳注：「市場経済」、議会制 および 資本主義的民主主義」、「文化」等〕を産みだすとき、または要請するときだと思われる³⁰⁾。

“cap” のこの抑圧作用を回避する手段としてデリダが持ち出したのは、「もうひとつの “cap”」の可能性である。他方、「税関」の語り手がこの抑圧作用をテキスト化させるために必要とした契機は、税関断首 (decapitation) の出来事であり、それに含意された、脱資本化、権力の脱中心化、倫理の脱普遍化、つまり “de-cap-itation” の概念である。彼にはロマンス執筆の材料は与えられていた。しかしそれが結実するには、ヘスターの物語が彼の物語に置き換えられなければならないのであったのである。百年前の物語が、現代の物語に変換されるとき、『緋文字』は誕生する。首 (cap) 切り、政治的罷免 (decapitation)、権力 (cap) の舞台から退くこと、資本 (cap) の論理を否定すること、言説の抑圧 (cap) 作用を暴くこと、資本の循環に組み込まれる文化 (cap) を皮肉ること、……これらを予告したのが「税関」であり、これをロマンスに結晶させたのが『緋文字』である。

『緋文字』には17世紀ピューリタンのモラルが濃厚に書き込まれていると言われる。だが、このテキストにはピューリタニズムを支える家父長制度や教会の理念が、むしろ共同体の刑罰だけに局限されている。ヘスターの夫であり、

パールの形式上の父であるチリングワスは家父長制度のなかの夫・父としては登場しない。パールを子として認めるのは、遺産という経済がかかわったときだけである。また姦通の罪に対してあれほど厳しい教会も、それ以外の事柄で教会の姿を現すことはない。むしろ知事の館での牧師の立場とか選挙演説等、政治との関わりが強調される。しかもヘスターの刺繍の「手仕事は、今でなら流行と言われるものとなって」(82)、「権力の手綱を扱う役人の威厳」(81)を保つためや、富の誇示の道具として使われた。そして彼女は、「自分が適当だと思った時間を針仕事にあてるだけで、簡単に相当の報酬を得」(82)ができたのだ。彼女の恥辱の印を織りなしていたはずの技術が、流通経路のって富を生産したのである。さらにこのテキストで主要な要素となる告白の装置は、近代市民社会形成の推進力——性の言説化——を引き受けるものでもある。他所で論じたように³¹⁾、姦通や告白をめぐる物語が進行する『緋文字』は、性の言説化と告白装置の「主体化＝隷属化 (*assujettissement*)」³²⁾による広範な抑圧作用を表象する。しかしそれと同時に、姦通場面の削除、告白内容の曖昧化は、このような近代市民社会の権力構造を侵犯し、相対化するものでもある。

『緋文字』の前触れとして、「税関」は、民主主義や自由自助という国家の法がいかに資本の論理に組み込まれているか、関税政策という資本の法がいかに修辞的なものかを、関税政策の渦中で衰退していったセイレムを舞台とし、政策上というよりも「通念」上罷免となった語り手を登場させることで、再現しているとみなすことができる。しかし次のような反論もあろう。語り手は資本と連携した役所を罷免された (*decapitated*) わけであるが、それによって逆にロマンス執筆で生計を得ることができ、したがって依然として資本の論理のなかにいるのではないか。だが、文学(「白い月光」の世界)の特権化を行う主題的読みからこぼれ落ちるテキストの多義性——社会を呼び込むことによってロマンスというジャンルを侵犯するテキストの言語——体制の変容を書き込みながら、物語のなかでそれを攪乱するプロット——ロマンス執筆の文化性を強調しながら、それを政治・経済のコンテクストのなかで提示する皮肉……それらはまさに、幕開けし前進をつづけようとしていた “*cap-italization*” (資本化・倫理の普遍化・言説による抑圧作用) という近代システムに対する、脱 “*cap*” (*de-cap-itation*) の行為と読むことができる。

注

- 1) Nina Baym, "The Romantic *Malgré Lui*: Hawthorne in 'The Custom House,'" in *The Scarlet Letter: An Authoritative Text Background and Sources Criticism* (Norton, 1978), p. 279.
- 2) Nathaniel Hawthorne, "The Custom-House," in *The Scarlet Letter*, vol. 1 of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* (Ohio State University Press, 1962), p. 3. なお "The Custom-House" および *The Scarlet Letter* からの引用はすべてこのテキストを用い、頁数は本文の引用箇所の後ろに括弧に入れて示す。
- 3) Nathaniel Hawthorne, "The Old Manse," in *Mosses from the Old Manse*, vol. 10 of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* (Ohio State University Press, 1974), pp. 3-35.
 なお Joel Pfister, *The Production of Personal Life: Class, Gender, & the Psychological in Hawthorne's Fiction* (Stanford University Press, 1991) は当テキストを19世紀アメリカ中産階級の家庭のイデオロギーの二面性 (一つは感傷的家族愛, もう一つは深層心理の葛藤を内包した「グロテスクな形態」) が、自伝的様式のなかに表明されていると論じている。
- 4) 例えば, Sam S. Backett, "The (Complete) *Scarlet Letter*," in *College English* 22 (1961), repr. *The Scarlet Letter* (Norton, 1978), pp. 259-79.
- 5) John Carlos Rowe, *Through the Custom-House: Nineteenth-Century American Fiction and Modern Theory* (The Johns Hopkins University Press, 1982), pp. 193-4.
- 6) *Ibid.*, p. 194.
- 7) Evan Carton, *The Rhetoric of American Romance: Dialectic and Identity in Emerson, Dickinson, Poe, and Hawthorne* (The Johns Hopkins University Press, 1985), pp. 151-164. 以下この箇所でのカールトンからの引用は、引用箇所の後ろに引用頁数を示す。
- 8) 以下の批評は「税関」論としてまとめたものではなく、他の批評に関連して述べられているものだが、「税関」の批評に新しい視点を提示するものである。
 Robert Clark, *History, Ideology & Myth in American Fiction, 1823-52* (MacMillan, 1984), pp. 111-16; Michael T. Gilmore, *American Romanticism and the Marketplace* (The University of Chicago Press, 1985), pp. 80-84; Jonathan Arac, "The Politics of *The Scarlet Letter*" in *Ideology and Classic American Literature*, eds. Sacvan Bercovitch and Myra Jehlen (Cambridge, 1986), pp. 247-67; Sacvan Bercovitch, *The Office of The Scarlet Letter* (The Johns Hopkins University Press, 1991), pp. 111-116; and Richard H. Millington, *Practicing Romance: Narrative Form and Cultural Engagement in Hawthorne's Fiction* (Princeton University Press, 1992), pp. 59-65.
- 9) 伝記的事実が喧伝される場合でも、背景がセイレム (魔女舞判がなされた場所) の税関であるというだけで、セイレムの税関であったということには触れられない。
- 10) 同様の分類がディヴィッド・スタウクによってなされている。David Stouck, "The Surveyor of 'The Custom House': A Narrator for *The Scarlet Letter*," in *The Scarlet Letter* (Norton, 1978), pp. 269-79.

- 11) 語り手の先祖の男性的・父権的性格, 経済的に自立できない物語作家の女性的性格については, John T. Irwin, *American Hieroglyphics: The Symbol of the Egyptian Hieroglyphics in the American Renaissance* (The Johns Hopkins University Press, 1980), pp. 270-76 参照。
- 12) Brook Thomas, *Cross-examination of law and literature: Cooper, Hawthorne, Stowe, and Melville*, (Cambridge University Press, 1987), p. 171. なお, このなかの引用は, Michael Grossberg, "Who Gets the Child? Custody, Guardianship, and the Rise of a Judicial Patriarchy in Nineteenth-century America," *Feminist Studies* 9 (1983), p. 236.
- 13) 友人で詩人の Epes Sargent に宛てた手紙 (1846年3月3日付)。Nathaniel Hawthorne, *The Letters, 1843-1853*, vol. 14 of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* (Ohio State University Press, 1985), p. 150.
- 14) Sophia Hawthorne が実母に宛てた手紙 (1846年3月23日付)。The Letters, 1843-1853, p. 151.
- 15) David Stouck は "The Surveyor of 'The Custom-House'" において, 「税関」で素描された三人の官吏の性格は理想化されているが, 『緋文字』では極端に歪曲され, 均衡を崩された形で三人の登場人物に転位されていると述べている。曰く, 旺盛な食欲など「動物的性質」を有する検査官は官能的生命力をもつヘスターに, 内省的で高踏的な徴収官はデムズデイルに, 有能な官吏は知性を追求するチリングワスに対応するといっているのである (pp. 274-5)。しかし「動物的性格」という言葉が, 『緋文字』のなかではヘスターではなく, デムズデイルを形容する言葉として使われていることなどから (第十章), この対応図式は正確とは言いかねる。
- 16) Brook Thomas, *Cross-examination of law and literature: Cooper, Hawthorne, Stowe, and Melville*, pp. 171-2.
- 17) 19世紀前半の関税政策をめぐる情勢については, 以下のテキスト参照。Harold Underwood Faulkner, *American Economic History* (Harper & Brothers Publishers, 1924), pp. 169-172 and 318-8; Samuel Eliot Morison, Henry Steele Commager and William E. Leuchtenburg, *The Growth of the American Republic*, vol. 1 (Oxford University Press, 1980), pp. 387-90 and 425-8; アメリカ学会『原典アメリカ史』第三巻 (岩波書店, 1953年) 396-405 頁等参照。
- 18) *American Economic History*, p. 246 and p. 251; Douglass C. North, *The Economic of the United States 1790-1860* (Norton, 1966), p. 62; Alfred Rosa, *Salem, Transcendentalism, and Hawthorne* (Associated University Presses, Inc., 1980), p. 23 参照。
- 19) Fredric Jameson, *The Political Unconscious: Narrative as a Socially Symbolic Act* (Cornell University Press, 1981), p. 214.
- 20) Sacvan Bercovitch, *The Office of the Scarlet Letter* p. 112. なお「税関」からの引用頁数はオハイオ版のものに改めた。
- 21) 例えば Michael T. Gilmore, *American Romanticism and the Marketplace* は, 当テキストをアメリカの文学市場の発展に結びつけて, 本を売って金を得る職業作家の宣言とみる。
- 22) Henry David Thoreau, "Civil Disobedience," in *Works of Henry David*

Thoreau, ed. Lily Owens (New York: Avenel Books, 1981), p. 420.

- 23) 1824年3月31日の合衆国議会における関税についての Henry Clay の発言。
 “Annals of the Congress of the United States,” in *The Debates and Proceedings in the Congress of the United States; with an Appendix, Containing Important State Papers and Public Documents, and All the Laws of a Public Nature; with Copious Index, Eighteenth Congress—First Session: Comprising the Period from December 1, 1823, to May 27, 1824, Inclusive* (Washington: Gale and Seaton, 1856) pp. 1962-63 and 1966.
- 24) 1824年4月2日の合衆国議会における関税についての Daniel Webster の発言。
 “Annals of the Congress of the United States,” in *The Debates and Proceedings in the Congress of the United States*, pp. 2035, 2056 and 2057.
- 25) 『原典アメリカ史』第三巻422頁。
- 26) Charles A. Beard, *The American Party Battle* (New York: The Book League of America, 1929). 急激な変化がなかったことについては, pp. 47-8 および p. 65. 他の部門との間に統一的な見解がないということについては, pp. 50-6.
- 27) 南北戦争前の政策パターン (不決定・調和の政策) を『緋文字』もしくは「税関」のテキストの不決定性に連動させて解釈したものに, Jonathan Arac, “The Politics of *The Scarlet Letter*” がある。とくに p. 257 参照。
- 28) 南北戦争前の合衆国における法の変化は, 「公の利益追求というレトリックを使いながら」, 「新しい事業・商業グループの台頭を可能にし, それによってアメリカの富と権力の不均衡を構築した」ことに関しては, 次のテキスト参照。Morton J. Horwitz, *The Transformation of American Law: 1780-1860* (Harvard University Press, 1977), pp. xiii-xvi.
- 29) Jean Baudrillard, *Amérique* (Paris: Éditions Grasset et Fasquelle, 1986), p. 150; *America*, trans. Chris Turner (London, New York: Verso, 1988), p. 76, 以下のこの箇所でのボードリヤールからの引用は, 引用箇所の後ろに引用頁数を, 仏語オリジナル, 英訳の順に記す。
- 30) Jacques Derrida, *L'Autre Cap* (Paris: Les Éditions de Minuit, 1991), p. 64-5; *The Other Heading: Reflections on Today's Europe*, trans. Pascale-Anne Brault and Michael B. Naas (Indiana University Press, 1992), p. 65.
- 31) 拙著, “The Discourse of Sexuality and the Confession Complex in *The Scarlet Letter*,” in *Forum 1* (The Nathaniel Hawthorne Society of Japan, 1991), pp. 41-9 参照。
- 32) Michel Foucault, *Histoire de la Sexualité: La Volonté de savoir* (Paris: Éditions Gallimard, 1979); *The History of Sexuality: An Introduction* trans. Robert Hurley (Penguin Books, 1981) 参照。